

cue

09



特集

## 床と幸せの関係

—— デンマーク取材レポート

床の記憶  
MESSAGE FROM FLOORS.

49



子供の頃、家の広縁の一部がこげているのを父が発見しました。

子供たちが火遊びをしているのだと思ったようで怒っていました。

私たち兄弟は何の覚えもなくきょとん…

結局、原因不明でしたが、数日後に原因がわかりました。

おばあちゃんが飼っている金魚のために

広縁で金魚鉢の水を温めていたので、  
その鉢の光が焦げの原因だったのです。

その後、祖母は他界しましたが、焦げ跡の黒点を見るたびに

祖母の優しい笑顔思い出します。

# 「特集」 床と幸せの関係

—— デンマーク取材レポート

ニュノーマルの時代を迎え、おうち時間の過ごし方が大きな関心事となり、心身の健康を保つ住まいのあり方が模索されるなか、今、あらためて世界幸福な国デンマークの暮らし方が注目されています。

デンマークでは住まいのインテリアが非常に重要な位置を占めており、人生の幸福度に大きく影響していると言われています。

そして私達は、日本において「床材」が

住まい手の人生の幸福度に大きく影響していると考えています。

なぜなら、ヨーロッパにおいてインテリアの主役とも言える「椅子」の

「身体を落ちつかせる場所」という役割を

日本では「床」が担ってきたからです。

今回は、私達によるデンマークでの現地取材と

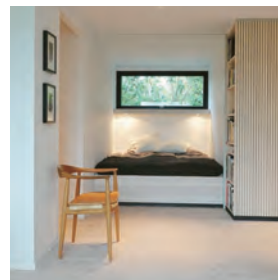
「住宅幸福論」を調査研究されているLIFULL HOME'S総研の

島原万丈氏へのインタビューを通じて、

「床と幸せの関係」について考えてみます。



ウェグナーのロッキングチェアを中心にシンプルにまとめられたインテリア。壁には薪ストーブ。床暖房も入っており心地よい空間でした。



## 幸福の国デンマークに学ぶ 住まい方のヒント



トリーネさん(左)とソアンさん夫妻  
デンマークでは意外と靴脱ぎで暮らす人が多いようです。 03

床と幸せの関係を考えるにあたり、まず、住まいと幸せの関係を明らかにするべく、デンマークの人々の暮らしに注目してみたいと思います。世界幸福度ランキングで毎年上位につくデンマークに「ヒュッゲ(hygge)」という言葉があります。日本語で「心地よさ」「ほっこり感」を意味するこの言葉は、デンマーク人の幸福度の根底にある、暮らしのなかで大切にしている概念として、数年前に世界的なブームになりました。

一昨年、世界の床を調査する企画で、デンマークの都市コペンハーゲンの住宅を訪問しました。施主はデンマークを代表する家具工房でウェグナーの家具を手掛けてきた木工職人。古い家を購入し、キッチンや家具だけでなく床も家主が自作して蘇らせた家は、まさにヒュッゲな空間でした。壁には薪ストーブがあり、ダイニングテーブルや窓際にはキャンドルが灯っていました。

床材はデンマークで一般的なバイン材で、ソープとホワイトオイルを使ってナチュラルに仕上げられており、室内を明るく優しい空間にしました。

デンマーク人は衣食住のなかで、特に住居の満足度を求める傾向があり、新築を手に入れるより古い家を買って自分流にリノベーションすることを好む人が多いそうです。



ナオミさん(右)とガブリエルさんはコペンハーゲン在住のアメリカ人建築家。デンマークに住み始めてからソックス、スリッパで過ごすようになったそうです。



インテリアで作る  
居心地が幸せの鍵



次に訪問したコペンハーゲン在住の建築家夫婦のお宅も、購入したアパートメントをDIYでリノベーションしていました。床はリノリウムを剥がして出てきたバイン材を再利用しており、ジョイントの隙間をパテ埋めして、こちらも白くナチュラルに仕上げています。モーエンセンのチェアやデンマークのヴィンテージ家具を愛用されており、こちらのお宅でもテーブルと窓際にはキャンドルが灯っていました。

多くの人が初任給でまず椅子を買うとも言われ、良い家具を人生の財産と考えるデンマーク。実際に、どちらのお宅のインテリアも住まい手の個性と強いこだわりが感じられる素敵な空間で、ヒュッゲ(心地よさ)に忠実な暮らしぶりが窺えました。

一軒家、アパートなど居住形態に関わらず、住まいを自ら積極的に、より居心地のよい空間へと作りこみ、そこで家族と過ごし、友人を招いてもてなす。そのように日々の住まいでの時間を愉しみ、愛しむのがデンマーク流の暮らし方住まい方です。

彼らを訪問し、お話を聞く中で、デンマークの人達にとって自己紹介でもあるインテリアへのこだわりが、住まい手の幸福感に強く繋がっていることを実感しました。



# Y Chair

CH24／Yチェア



北欧家具の本家本元デンマークの巨匠ハンス・J・ウェグナーの代表作です。Yチェアは、木の特性を活かしたシンプルでいて人間工学に基づく使い勝手の良さを特徴とするウェグナーの哲学がもっとも反映された作品とも言えます。例えば、2次元加工のパーツをうまく組みあわせることで3次元に見せるなど、構造と木の特性をよく理解したデザインとなっています。こういった構造の工夫と機械加工による抑えた価格、個性的でありながら主張しすぎないデザインがこの椅子を世界的なベストセラーにしました。

## Kaare Klint



コーア・クリント (1888-1954)

コーア・クリントは、「デンマーク近代家具デザインの父」と呼ばれるデザイナー。デンマーク王立芸術アカデミーの建築科に家具コースを作ること尽力し、クリントが初代教授を務めた家具デザイン科ではその後のデンマーク家具を牽引したデザイナーを多く輩出しました。

## Arne Jacobsen



アルネ・ヤコブセン (1902-1971)

コペンハーゲン出身の建築家・デザイナーで、シンプルで研ぎ澄まされたデザインが魅力です。建築作品も多く残っていますが、有名なのは椅子のデザイン。「セブンチェア」や「アントチェア」、包まれているような感覚の「エッグチェア」や「スワンチェア」が有名です。

## Borge Mogensen



ボーエ・モーエンセン (1914-1972)

ウェグナーとは同い年で公私ともに非常に親交が深かったそうです。余分な装飾を排し、無駄の無い構造を追及したシンプルで質実剛健なデザインが魅力です。アメリカのシェーカー家具の影響を受けた「シェーカーチェア J39」や「スパニッシュチェア」などが代表作です。

## デンマーク家具の 巨匠たち

長い冬の間室内で過ごす時間が多いため、快適な住空間が発達したデンマークには、機能的でデザイン性の高い家具が数多く作り出されました。ここで代表的なデザイナーを紹介します。

## Hans J. Wegner



ハンス・J・ウェグナー (1914-2007)

デンマーク家具黄金時代を代表するデザイナー。500脚以上の椅子をデザインし、椅子の巨匠として知られています。ペーパーコード張りの座面で座り心地の良い「Yチェア」や、低い座面で背もたれの高い「ピーコックチェア」が超ロングセラーとなっています。

## Finn Juhl



フィン・ユール (1912-1989)

コペンハーゲン出身の建築家・家具デザイナーで、建築や彫刻から影響を受けた美しいデザインが特徴です。ユールの生み出す家具は彫刻作品を思わせる美しい曲線が魅力。「No.53 Easy Chair」や「ペリカンチェア」、世界で最も美しいアームのイスと言われる「No.45」などが有名です。

LIFULL HOME'S総研では、住まい、住むことについてテーマを決めて調査研究レポートを作ってきました。その中で結局「住む」って何だろう、と考えた時に、住むことは生きることと極めて密接に結びついており、より良い住まいを探すということは、より良い暮らし、生き方を探すことでもあり、それはみんなが幸せに向かってちよつとずつ動いている、と考えて良いのではないか、というところにたどり着きました。そこから「住宅幸福論」をテーマに調査研究をスタートしました。

日本とデンマークを対比する中でわかったことは、両国とも住生活の満足度の高さと人生の幸福度は正の相関関係にあり、比較すれば日本人のほうが、相関度が高いということです。

デンマーク人は、家を交流の場と考え、インテリアによって自分を表現し、人を招いて住生活の幸福感を得ており、また、ヒュッゲ（居心地の良さ）を重視し、住生活の改善に熱心です。それに対して、日本人は、家をプライベートな空間と考えるが、実質的には「寝に帰る」場所で、低次の欲求レベルに留まっている。また利便性や治安を重視した新築の家を好みますが、居心地の良さを自ら改善していかうとする意欲が低い。

つまり、デンマーク人の住生活における幸

福度の源泉は、「住まいに対してより良くしていかうというマインド」であり、日本人に足りないのは、住むことへの主体性ではないか。

日本人は、新築か中古か、持ち家が賃貸か、といったハコ志向で、そこに満足度の源泉があります。そうするとお金がある人は立派な家に住めて幸せで、そうでない人は不幸せということになりかねません。しかし、より良い住空間を作っていこう、関わっていこうという行動・行為に幸せの源泉を持つてくることが出来れば、誰にでも幸福になれる機会が均等にあることになります。

どんな家に住んでも、住まい手がよりよくしていこうと日常的に関わりを持てるのは基本的には内装、インテリアです。調査データで見ると模様替え一つでも効果があります。アートを飾ったり、カーテンを変えたり、グリーンを育てたり。もちろん床は簡単には張り替えできませんが、本物素材の床は、経年で良くなり手入れをしていけば愛着がわいてきます。

現在、リノベーション市場で住宅業界とインテリア業界との協業の動きが出てきていますが、住宅業界は、今後、従来のハコの供給産業から、住まい手の意欲を育てる住まい産業へシフトしていくべきなのではないかと考えています。

## 日本・デンマーク住生活比較調査から「幸福な国の住まい方」をまとめられた島原万丈氏にお話を伺いました

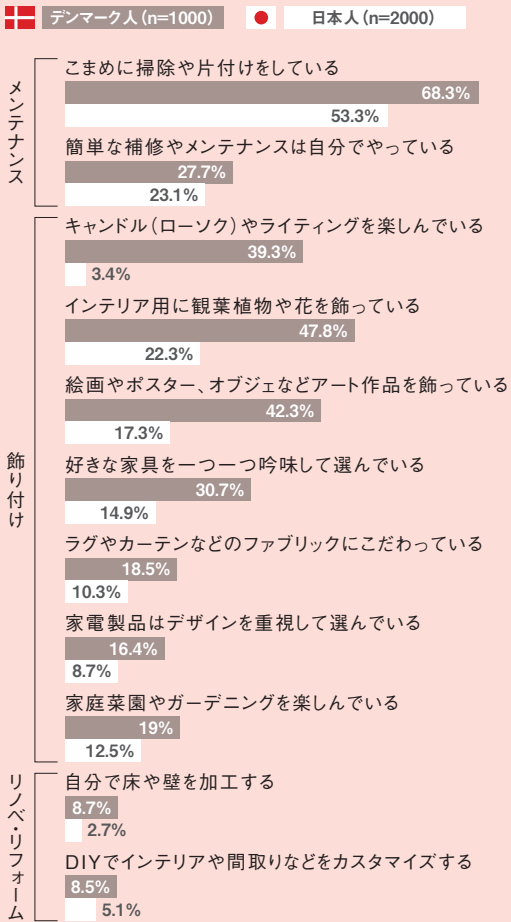


## 住まいのインテリアへの働きかけが人生の幸福度を左右する

LIFULL HOME'S 総研所長  
島原 万丈

1989年株式会社リクルート入社。2005年よりリクルート住宅総研。2013年3月リクルートを退社、同年株式会社ネクスト（現・株式会社LIFULL）で HOME'S総研（現・LIFULL HOME'S総研）所長に就任。他に一般社団法人リノベーション協議会設立発起人、国交省「中古住宅・リフォームトータルプラン」検討委員など。

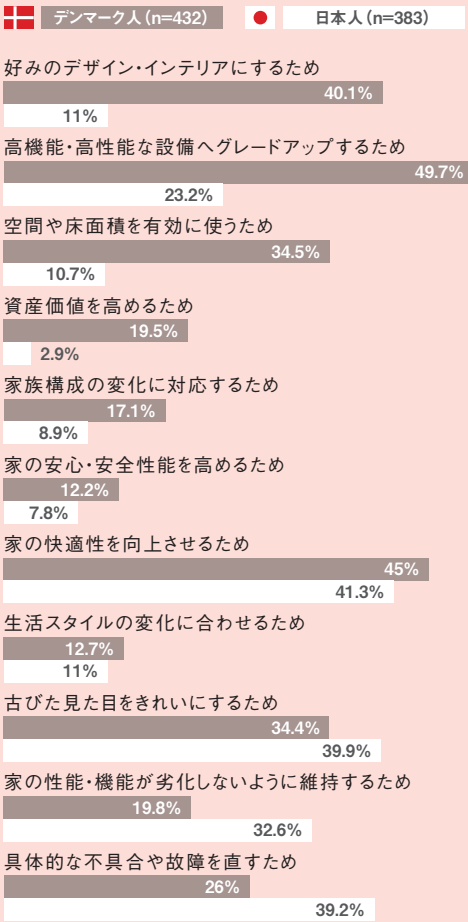
### あなたがお住まいの中でよくしていることは？



### ポイント

デンマーク人は具体的な行動が多い。日本人では「こまめな掃除や片付け」以外の行動が全般的に少ない。

### どのような目的でリフォーム・リノベーションしましたか？



### ポイント

快適性の向上は共通だが、デンマーク人はグレードアップ、日本人は不具合・劣化対策の目的が多い。

\*グラフは「住宅幸福論Episode2 幸福の国の住まい方」P122、126を参考にして編集部にて作成

デンマークの家庭では家族一人一人にお気に入りの椅子があり、その椅子が家の中の「居場所」そのものになっていることも多いそうです。だからこそ、デンマーク人は長く人生を共に過ごすパートナーを選ぶように椅子を選びます。

住まいの歴史的な成り立ちを日本とヨーロッパで比較した時、日本では、身体を安らげる「居場所」は「床」が担ってきました。畳でも木床でも、床に直接座ったり寝転んだりするのは、今の時代でも日本の暮らしの日常的な風景です。それなら、デンマーク人が家具を選ぶような目線で床材を選んでみてはどうでしょうか。

経年で味わいを深める素材、隙や反りのない安定した品質、肌触りが良い表面仕上げ。直接身体が触れるものだからこそ、細部にまでこだわった日本の床は、住まいにヒュッゲを生み出します。事実、私達の挽き板フローリングを採用頂いた方へのアンケートでは、住んでから思う選んでよかったポイントとして「触感」を挙げられる方が圧倒的に多いのですが、これは日本人ならではの感性と言えるでしょう。

居心地のいい住まいは人を幸せにします。そこでは、ハコの良し悪しではなく、住まい手自らが住空間を良くしてこようと意欲を持って行動することが重要となり、住まい手が日々の暮らしで関与できるインテリアに手を掛けていくという行為そのものが人生の幸福度を高めます。

そして、家を建てたり、リフォームする際は、ぜひお気に入りの家具を選ぶ目線で床材を選んでみてください。お気に入りの床材は、きっと人生の幸福度を高めてくれると思います。

(文／取材・西村)

## 床と幸せの関係



### Episode 1

住まいの幸福を疑え



### Episode 2

幸福の国の住まい方  
日本・デンマーク住生活比較調査



### Episode 3

lonely happy liberties  
ひとり暮らしの時代



## 新しい時代の 住まいの幸福を考える 「住宅幸福論」シリーズ



全てのレポートはLIFULL HOME'S総研の  
Webサイトよりダウンロードできます。  
<https://www.homes.co.jp/souken/report/>

LIFULL HOME'S総研が発行する調査研究レポート  
「住宅幸福論」シリーズ。

エピソード1では、住まいの幸福度は、世帯年収の影響を排除すれば、どんな居住形態でも、つまり持ち家か賃貸か、新築か中古か、戸建てかマンションかなどは関係なく、大差がないことを明らかにしています。

そして、ハコより暮らし方や家に対する向き合い方が重要であるという結論から、暮らし方、家に対する意識などをデンマークと比較しながら、幸福な住生活へのヒントを追求したのがエピソード2。

住生活を「街」の満足度と「家」の満足度に分割すると、「家」の満足度は「街」の2倍強の影響を及ぼしていること、デンマークでは「家での交流頻度」の高さが、日本では「インテリアへの行動」の多さが「家」の満足度に大きく影響していることなど、大規模な生活者調査の分析・検証から導かれる考察は、非常に示唆に富む内容となっています。

## 床のHyggeポイント

日本の住まいでは床に触れながら過ごすので、

床で住み心地の満足度が変わります。

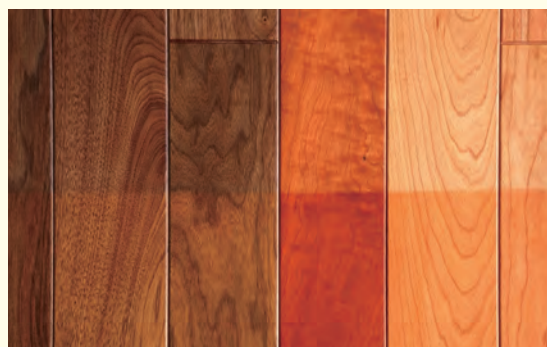
床を意識してみると思っている以上にたくさんのヒュッゲポイントが見つかりますよ！

当社の挽き板フローリングLiveNaturalプレミアムを例に見てみましょう。



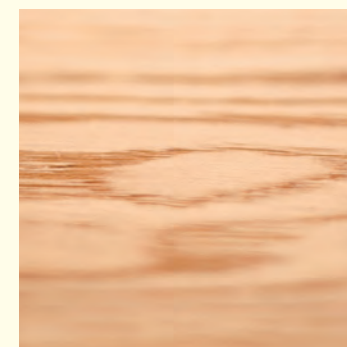
### 触り心地

素足で触れるからこそ重要なのが触感です。カンナで削った表面のような滑らかな触り心地は、もっとも満足度を高めるポイントです。



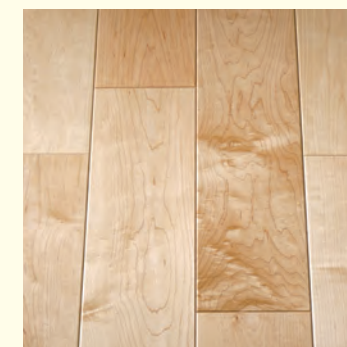
### 経年変化

本物の木は使い込むほどに味が出て価値を増します。一緒に歳を取っていける天然素材は木に限らず魅力的ですね。写真は左がブラックウォルナット、右がブラックチェリーで、それぞれ上が経年変化前、下が経年変化後。樹種によって濃くなったり薄くなったり様々な変化をします。



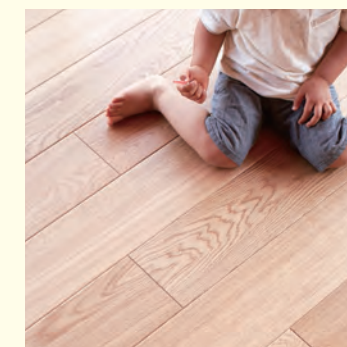
### 天然木の温かさ

木の文化を持つ日本。古より木に親しんできた日本人にとって本物の木であること自体がヒュッゲです。



### テリの妙

見る角度によって光り輝く美しい杢目は天然木ならではの。細胞という複雑な組織構造を持つ本物の木の最大の特徴の一つです。



### 床暖房でも安心

足元からじんわりと温まる床暖房。木は中の水分量の変化で伸縮しますが、基材構成の工夫で挙動を無垢の1/10に抑えており安心して使えます。

# Hygge!

Hygge(ヒュッゲ)とは、

日本語で「心地よさ」「ほっこり感」を意味するデンマークの言葉。

幸福の国デンマークの人々の暮らし方、心の持ち方をあらわす概念として、ニューノーマル時代の今、あらためて世界的に注目されています。

北欧の名作家具が映える、  
美しく洗練された住まい

「sophisticated residence」

邸宅文化を継ぐ閑静な住宅街に建つマンションのリフォーム事例。北欧ヴィンテージの名作家具が並び、独創的なアートやアンティーク雑貨が印象的な上質空間。床材に Live Natural Premium MOMENT ECRU を採用頂きましたインテリアコーディネーターの栗山誠子さんにお話を伺いました。

今回のリフォームのコンセプトや、  
スタイリングのポイントを教えてください。

今回はご自宅のリビングが暗く感じるので、明るくしたいというご相談を受けてのリフォームでした。リフォーム前は木部全体がダークブラウンでまとめられていて、床は照明の光が映り込むほど光沢のある仕上げ。ヴィンテージの北欧家具やアンティーク雑貨が配されたその重厚感あるリビングは格好良いのですが、「暗い」印象が否めませんでした。ただ明るいだけではなく、家具や調度品の魅力が際立つ居心地の良いお部屋にするために、「洗練された上質な空間」をコンセプトに定め、フローリングを替えて空間をオフニュートラルに整えようと計画を進めました。

当社のライブナチュラルプレミアムを  
ご採用頂いた経緯を教えてください。

「上質」「洗練」というインテリアイメージに合致し、且つ今回は床暖房対応のフローリングであることが条件。実は他のメーカーにイメージが合うフローリングがなかったのですが、板厚や床暖房対応という条件をクリアでませんでした。様々なメーカーのフローリングを比較検討して辿り着いたのがLive Natural Premium シリーズの「アッシュ」と「オークN45」。そして「ECRU」。アッシュは優しい色と力強い木目が印象的、オークは綺麗な木目ですがアッシュより木地は黄色味があり、節の多いものだと素材感が際立ってナチュラルな印象になりがちです。最終的に採用した「ECRU」を選んだ理由は、MOMENT シリーズ特有のチョークドスクラッチ加工によって木目に入り込んだ顔料がオークの黄色味をうまく抑えていて、その落ち着いた生成り色はまさに今回の空間に求めるオフニュートラルカラーだったことと、明るいのに奥行きのある落ち着いた表情がイメージにぴったりだったからです。

最後に一言、お願いします。

打合せではお客様から「どれが良いですか？」というご質問を受けることがあります。ライフスタイルやインテリアは百人百様で、そこに住まう方が居心地が良いと感じる空間がその人にとっての「良い」だと思いますので、まずはどのようなインテリアにしたいのか、何を居心地良く感じられるのかを伺うことから始めます。今回はお客様のご要望が明確であったため、コンセプトの設定はスムーズでした。マンションリフォームには制約が多く、苦労することもありましたが、床だけを替えて居心地の良い空間になった今回のリフォームでは、空間における床材の効果をあらためて実感しました。（取材・田中



モダンなインテリア雑貨、趣のある骨董品が目を惹くダイニングルーム。ローズウッドを使ったヴィンテージ家具とのコントラストが美しい。



北欧を代表するデザイナー、フィン・ユールの名作椅子「No.45」と。



リフォーム前。重厚感があり格好良い空間だが、暗い印象だった。

Live Natural Premium MOMENT ECRUを採用頂いたリビングルーム。グレーカラーに自然と溶け込む生成り色の床材 ECRU。上質な空間に、さりげなく配された北欧家具やコンテンポラリーアートが映えるスタイリッシュな北欧テイスト空間に。

インテリアコーディネーター  
栗山 誠子

住宅メーカーIC、モデルルームのプランニング及び設営、インテリア輸入販売、百貨店ICを経て、現在はフリーランスで活躍中。ジャンルを問わないインテリアスタイリングで幅広いニーズに応える。





ジョー・パス  
(Wikipedia より)



スティーヴ・ハウ  
(Wikipedia より)

## フルアコの名器

### 1949年デビューの超ロングセラーのエレクトリックギター

エレクトリック・ギターはボディの構造によって

- ①ソリッド(空洞を持たない。中身が詰まっている。)
  - ②フルアコ(板を貼り合わせた箱の様な形状の為に空洞がある。)
  - ③セミアコ(空洞ボディの中央にピックアップ等のパーツを載せる木材<センターブロック>が組み込まれている。)
- の3種類に分けられています。

エレクトリックギター誕生のアイデアは、1936年頃にジャズギタリストのチャーリー・クリスチャンの「バンドの中でもギターソロを弾きたい」という考えからスタートしました。その為に彼は従来の生ギターにピックアップ\*を付けたギターを使い始めました。これがエレクトリック・ギターの第1号と言われておりボディ構造は②フルアコタイプです。一般的に①のソリッドタイプはシャープな音の特徴でロック向き、②のフルアコは甘く艶やかな音の特徴でジャズやブルースに向いていると言われています。

今回は1949年にデビューしてから現在でも生産され続けている超ロングセラーのフルアコの名器、アメリカの老舗ギターメーカーであるギブソン社のES-175を紹介させていただきます。

### ES-175の特徴

今でこそES-175はフルアコの代表モデルとなっていますが、1949年のデビュー当時はギブソン社のフルアコ最高グレードモデルである「L-5」の廉価版として設計され発売されていたのです。モデル名ともなっている175は定価175ドルから命名されています。

ES-175は最上級モデル「L-5」がボディトップ材にアコースティックギターのように一枚板の無垢材スプルースを採用しているのに対して、コストダウンの為に3層(メープル+ポプラ+メープル)合板を採用しています。この仕様はコストダウン効果だけではなく、トップ材の鳴りを抑える事にもなり、大音響で演奏してもハウリングの軽減効果にも繋がり大きなホールでの演奏を可能にしました。

「L-5」がネックにメープル材、指板には高級材エボニーを採用していたのに対して、ES-175ではネックにマホガニー、指板にはローズウッドを採用する事で特徴的な太く艶やかな甘いサウンドトーンを生み出す事となりました。更に「L-5」より小振りなサイズも演奏性の向上や取り回しの良さが支持される事となりました。

### ES-175の愛用者

ジョー・パス、ジム・ホール、ウェス・モンゴメリー等の一流ジャズギタリストは勿論の事、ES-175独自の豊かな重低音やパワフルなサウンドはフュージョンギタリストのパット・メセニーやロックグループYE Sのスティーヴ・ハウ等あらゆるジャンルのギタリスト達から愛用されています。(文・相原)

※ピックアップ…弦の振動を電気信号に変えてアンプから音を出す装置

知っていると役立つ  
床のおはなし

床

知ってこそ知識

## 「床」にウイルス対策って必要？



新型コロナウイルスによって生活が大きく変わりました。マスク着用やアルコール消毒が当たり前になり、「抗ウイルス」「抗菌」性能を持った商品が続々と登場しています。外ではしっかりと意識されている感染対策、おうちの「中」はどうでしょうか？

咳やくしゃみ、会話による飛沫は空気中を漂い、最終的に「床」に落下します。ウイルスや菌を含んだ飛沫は数日の間、感染力を持つとされているため、飛沫が付いた床に触れてしまうことで、感染リスクが生まれます。さらに、床に付着したウイルスは日常生活における何気ない行動によって家の中に拡散します。

玄関で靴を脱ぐ文化の日本人は、たくさんの方の足を床の上で行い、足だけでなく手や身体も床に直接触れる機会が多いです。しかし、ウイルスや菌は目に見えないこともあり、感染対策として床に対する意識が低いのが現状です。

「抗ウイルス」「抗菌」性能のある床を使うと、お掃除の際の拭き残しや、お掃除後にウイルス・菌が付着した場合でも安心。表面についたウイルス・菌の数を減らしたり増殖を抑制することが出来ます。大切な人がいるおうちの「床」を衛生的に保つことで、より安全に安心して日々を過ごせるのではないでしょうか。(文・榮)



このサイトでは、  
フローリングの木材や作り方、選び方、歴史や文化のことなど、  
様々なアプローチから私たちの日々の研究の成果をお伝えしています。

朝日ウッドテックが運営するWebサイト  
「フローリング総合研究所」  
<https://www.woodtec.co.jp/lab/>



#### スペシャルコンテンツ

あなたにぴったりのフローリングが見つかる「フローリング診断」、フローリングにまつわる様々な情報を検定問題にした「フローリング検定」「床は大事 総選挙」など参加型コンテンツです。



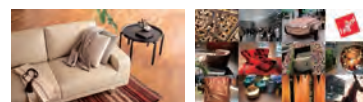
#### メンテナンス研究室

床に関わるプロと住まい手が知っておきたいお手入れと補修方法、よくある不具合事例をまとめています。



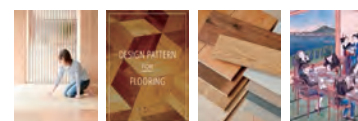
#### コーディネート研究室

木の床をベースとしたインテリアコーディネートの基本とインテリア・デザイントレンドの発信地ミラノサローネの情報をまとめています。



#### フローリング研究室

木の床の歴史、種類、デザイン、選び方、そしてどのようにして作られるのか、などをご紹介します。



#### 木のこゝ研究室

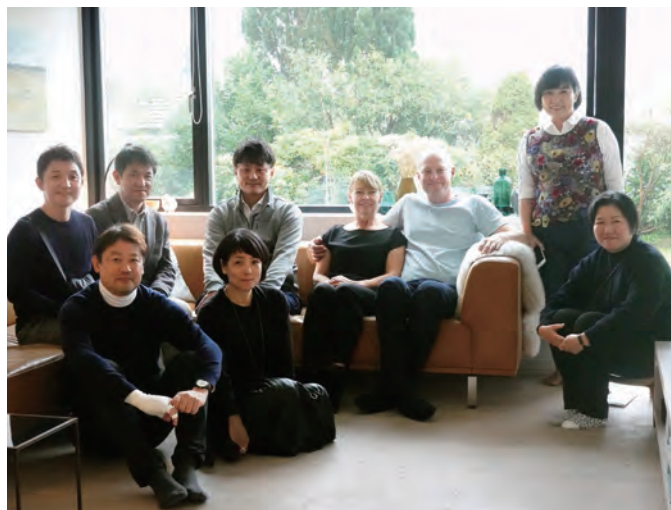
世界の巨樹・巨木、それぞれの樹がもつ物語、楽器とその材料として使われている木のお話しをご紹介します。



#### 床は大事研究室

建築家やデザイナーなどプロフェッショナルの語る「床は大事」。また、床に関わるエピソードを紹介しています。





ご意見・ご質問・ご要望等ございましたら、  
info2@woodtec.co.jpまで。

世界の床を探求するプロジェクトメンバーです。  
コペンハーゲンのトリーネさんソアンさん宅にて。

## 編集後記



コロナ禍になって自宅で過ごす時間が増えたので、運動不足解消のため、話題になっていたリングフィットアドベンチャーを始めました。ゲームとはいえ私にはなかなかハードだったのですが、前より階段の上り下りが楽になったりと、少しずつ効果も出てきました!ストーリーを進めながら楽しく運動できて、おすすめです。(山野)



今回ご紹介させて頂いたES-175の愛用者であるジョー・バスの代表作と言えば1973年録音の「ヴァーチュオーゾ」です。全編ギター1本だけでJazzのスタンダードナンバーを独特のギタートーンと演奏技術で表現した大変素晴らしい作品で個人的にも愛聴盤の一枚です。50年近く前の録音ですが、今聞いても全く古さを感じさせません。(相原)



自宅で過ごす時間を充実させたいと、映画配信サービスを利用するようになりました。中でもミニシアター系映画館が自社配給した作品を配信するサービスは秀逸で、世界各国の多様な作品を見ることができます。今迄知らなかった作品と偶然に出会うことも楽しみの一つとなっています。(田中)



新型コロナウイルスでなかなか旅行や外食に行けない日々が続いています。車に乗ったまま楽しめる景色を見にドライブしたり、家飲みが多くなりました。もともと家ではあまりお酒は飲まなかったのですが、「アイスの実」を氷の代わりに入れて飲むチューハイにハマっています。「アイスの実」が溶けてトロトロになって美味しいです!(榮)



今回の撮影に使ったYチェアは私の私物です。インテリアが大好きなので、アイラーセンのソファや、ルイスポールセンの照明などデンマークのプロダクトを自宅で愛用しています。あと床を張り替えれば、よりヒュッグなのですが、今は賃貸暮らしなのでまだもう少し先になりそうです。(西村)

発行日 2021年03月20日  
編集長 西村公孝  
デザイン 鈴木信輔(ボード)  
イラスト 西端 薫 [P07]  
鈴木志穂 [P18]  
発行 朝日ウッドテック株式会社

# cue

09

【cue(キュー) = 手掛かり、きっかけ】

## 土間と床と家具

「土間は家の原点です。そこに安心できる場所として「床」が発生するか「家具」が発生するかで、日本と西洋の住文化は分かれました。日本の床は西洋の家具と等価なんです。」

建築家の黒川雅之さんは著書『デザインの修辞法』の中でそう語ります。

今号の特集「床と幸せの関係」で日本ではインテリアの中の「床」が、住まいの居心地を大きく左右するというお話をさせていただきました。日本と西洋では床に対する考え方が異なります。西洋と日本の住文化の発展の仕方を見ることで、日本における住まいの「床」の位置付けが見えてきます。

住まいの成り立ちを考えると、最初の家屋は土の上に屋根を架けただけのものでした。その土間に寝るための敷物としてベッドや椅子が作られ、「家具」として発展していったのが西洋の建築・住文化。土間に敷かれた敷物が家具にならず、履物を脱いで上がる「床」になつていったのが日本の建築・住文化です。来客との接点の場として土間を残しながら、床に畳を敷き、布団やお膳などの小道具を發展させて日本の床の文化系統をつくり上げました。

つまり、西洋の家は全て床が土間の感覚で、家具を「ちょっと落ち着ける場所」としたのに対して、日本では床を貼ることで「ちょっと落ち着く場所」をつくりあげたのです。

日本には家具の歴史がなく、西洋には床がありません。土間から家具へという発展と、土間から床へという発展の違いが、西洋と日本の建築を全く変えてしまいました。そしてそれは、生活する上での様々な作法にも影響を与えています。

(黒川雅之著『デザインの修辞法』より)

次号CUE10号では、著者である黒川雅之さんにお話を伺い、西洋と日本の建築や住生活、床の違いについて詳しくご紹介いたします。

(文・山野)

